

児童館におけるドロップインセンター「ふらっと」の試み

- 1次予防と2次予防を目指した地域ネットワーク事業としての子育て支援 -

<少子化と子育て不安>

子育てに大きな不安を持つ親、あるいは子どもに対して不適切な扱いをしてしまう親が増えていると同時に、子どもを産まない家庭も増加しています。これは社会的にも大きな問題です。そこで、政府は、働く女性が安心して子どもを産み育てやすい環境をつくるため、子どもを預かる機能を充実・発展させることを主なねらいとしたエンゼルプラン・新エンゼルプランを計画して実行しました。そのおかげで、乳児保育・延長保育・時間外保育・保育ママ・ファミリーサポートセンターなどさまざまな形で、親は子どもを預けられるようになったのですが、これだけでは、子育て不安の原因がすべて解消されませんでした。このことは、合計特殊出生率といわれる統計指標の推移に現れています（1994年1.50、2003年1.29）。

<次世代育成支援対策推進法と地域連携・地域ネットワーク>

そこで、政府はあたらしく、次世代育成支援対策推進法を成立させました。これは、働きながら子どもを育てている人だけでなく子育てをしているすべての家庭と次世代を育む親となる人も支援の対象にしたことに大きな特徴があります。この法律が実現を目指しているのは、さらなる保育サービスの充実に加えて、男性を含めた働き方の見直しや仕事と子育ての両立の推進、地域の子育てサービスの充実とネットワークづくりの推進や家庭教育への支援、子どもや若者が親になるために学ぶ機会の提供や若者の安定就労と自立的生活の促進などです。そして、地方自治体、企業、諸団体、学校、地域住民などがネットワークを組み、各地域のなかで子育て支援を主体的に担っていくことが期待されています。

<子育て支援の枠組み>

子育て支援の枠組みとしては、カナダのものが参考になると思います。この枠組みは、問題点の予防と問題点への対応とに大きく分けられます。そして、予防段階は「親になるための教育」「周産期にある両親への支援」「子育てに対する間接支援」で構成され、対応段階は「問題をかかえる親子へのカウンセリング等の直接援助」「行政による福祉サービス提供」「法改正や環境整備などの社会変革」で構成されています。さらに、これらの支援機能が地域の様々なエイジェンシーやエイジェントの緊密で柔軟な連携によって支えられているのです。

< 1次予防と2次予防の大切さ >

十代の妊娠・出産、ドメスティックバイオレンス等による家庭の崩壊、子どもに対するマルトリートメントなどに代表されるさまざまな問題に対応することは非常に重要です。しかし、そのような問題が表面化しないように未然に対応する予防的支援も同じように重要です。そのなかでも、いったん表面化した問題の再発防止を図る3次予防だけではなく、問題が表面化する可能性をもつと思われる人への2次予防策および現時点では問題をまったくもたない人への1次予防策も大切なのです。

< ドロップインと1次予防・2次予防の統合 >

家庭において育児を担う親が不安を抱かないようにするための支援（1次予防）と、子どもの養育に関して具体的で深刻な悩みを抱えている親が不適應になったり問題行動を起こしたりしないための支援（2次予防）が必要であることはすでに述べました。しかし、それほど深刻ではないものの「本当にこのままでいいのだろうか」といった漠然とした不安を抱えるような、同時に2つの予防策の対象となる親も現実には多いと思われます。このことは、例えば、母親たちが乳幼児の定期健診に際して「自分がテストされているような気がする」「子どもがちゃんと発達していないと叱られるかもしれない」といった意識を持つことからわかります。1次予防と2次予防を統合的に同時に提供する場が求められていると考えられる。そして、このような場が有効に利用されるためには、親がそのような予防的支援（子育ての仲間がいるといいな、いつでも困ったときに相談できる人がいるといいな）を必要とするときに気軽に立ち寄れることが大きな前提となります。「いつでも必要なときに気軽に立ち寄ることのできる場所」をドロップインセンターと呼びます。

< 児童館は統合機能とドロップインを実現できる場 >

児童館は、地域の児童に健全な遊びを与え、その健康を増進し情操を豊かにすることを目的とした施設です。子どもの健全育成が中心的な目的なのですが、児童館は子育て支援・家庭支援にも大きな役割を果たしています。例えば、乳幼児とその母親を対象とする「親子クラブ」「親子ひろば」は、親子のスキンシップを深める親子遊びを中心としながらも、母親の仲間づくりを進めることによって母親の孤立を防ぎ、同時にその育児能力を高めることにも役立っています。また、児童館の本来的な機能として、いつでも親子で自由に気軽に利用し、親子どうしが交流できる場も提供しているのです。さらに、児童館には子どもの発達に関して専門性のある職員が配置されているのです。このようなことに着目するならば、児童館は従来から1次予防のみならず2次予防を提供できるドロップインを前提とした複合機能をもつ子育て支援のための場だったのです。しかし、児童館イコール児童が遊ぶところと、児童を預かるところといったイメージが強かったため、これらの機能が一般の人々には十分に周知されていなかったのです。

<神戸において児童館に着目する意味>

児童館が地域の家庭に開かれた子どものための施設であり、子育て支援・家庭支援のための身近で有用な資源であることはすでに述べましたが、他の自治体に比べて、神戸市には児童館数が多く、学校の空き教室を利用した学童保育コーナーを除き市内9区に93ヶ所もあるのです。つまり、神戸市内在住の家庭にとって、自宅に比較的近いところに必ず児童館があることとなります。しかし、「登録しないと利用できない」「親子クラブは、相談の場ではなく、プログラムに参加するだけの場である」「3歳以上の子どもでないと受け入れてもらえない」など親の側にいくつかの誤解があったために、これまで気軽に立ち寄る親子が多くなかったのは事実です。しかし、実際には、親子が気軽に立ち寄って遊んだり相談したりしやすい場なのです。そこで、神戸大学大学院人間科学研究科に設置されたヒューマンコミュニティ創成研究センター・子ども家庭支援部門が、児童館が本来持っているドロップインを前提とした1次予防と2次予防という潜在的機能が十分にはたされるように「児童館が、(1)周産期にある母親も含め、子どもの年齢を問わず誰もが利用できる場であること、(2)子どもを預かるのではなく、親子と一緒に遊べる場であること、(3)プログラムはなく定められた日と時間帯のうちであれば、いつ来ていつ帰っても構わない自由な場であること、(4)育児や子どもの発達について相談したければ、それができる場であること」の4つの要素を盛り込んで、子育て支援実践を試行的におこなったのです。

<ドロップインセンター「ふらっと」>

すでに述べたように、児童館が本来もっている機能を顕在化させて、地域の親子に対する1次予防と2次予防の同時達成を目指すドロップインセンターを「ふらっと」と名づけました。「ふらっと」では、次のような工夫をしました。まず、地域の親子が児童館に出かけようとするときの心理的抵抗感を極力なくすこと、言い換えれば、敷居を低くして母親が気楽に子どもを連れて通えるという気持ちを持てるようにすることが大事だと考えて、先に示しました4つの要素のうち、まず(3)を基本方針としました。次に、児童館は3歳以上から小学校低学年までの子どものための施設であるという一般的な認識を変えるために(1)を基本方針に加えしました。さらに、自分たちが主体的・積極的に他の親子と交流をすすめていくことを通して互いに支援しあうことの重要性を認識してもらうために、(2)の方針によって子どもを預かってもらえる場ではないことを強調しました。これら(1)～(3)は1次予防に関連した方針です。さらに、2次予防のためにたてられた基本方針が(4)です。ただし、相談したいときだけ自分から相談するといっても、消極的な親もいることは十分に予測できましたので、相談を自然なかたちで引き出せるような働きかけや、いつ相談されても対応できるように普段から親子の様子に関心をもって準備しておくことに配慮しました。なお、この取り組みは、神戸市灘区保健福祉部、六甲道児童館と神戸大学との連携事業であり、灘区は主に広報と運営上のアドバイスをすること、六甲道児童館は主に場所とおもちゃ等の提供、広報および運営上のアドバイスをすること、大学は相談員と学生ボランテ

ィアの配置を含めた活動内容全体に責任をもつことで合意しました。

< 「ふらっと」の活動内容 >

この試行的な取り組みは、2004年4月に始められました。神戸市灘区 JR 六甲道駅にある神戸市立六甲道児童館のプレイルーム約 150 m²において、毎週火曜日午前 10 時～正午および午後 1 時～午後 3 時に開設しました。開設曜日と祝日が重なった場合、および、学校の夏休み・冬休み期間中は開設しませんでした。神戸市広報（灘区版）や児童館だよりで広報をおこなう他、児童館の職員さんが、児童館が提供する事業を利用する親に対して、あるいは、電話での親子クラブに関する問い合わせのときに、必ず「ふらっと」について知らせてくださいました。さらに、「ふらっと」の相談員のひとりが地域活動コーディネーターとしてかかわっている灘区役所での 4 ヶ月健診や近隣地域での研修会等の場で広報をおこないました。保育士と幼稚園教諭、助産師と看護師、看護師の資格を持つ 3 名の相談員を配置しました。さらに、遊びの補助・充実のためのスタッフとして、また、親が相談員と話し合っているあいだの子ども遊び相手として、神戸大学の学生ボランティアも 1 日につき 3 名～7 名を配置しました。利用者の方には、毎回、「親の名前」「連れてきた子どもの名前と年齢」「居住地の町名」を備え付けの用紙に記入するようお願いしました。遊んでいるあいだの親子の様子や相談を受けた場合の相談内容・対応内容を、午前のセッション終了直後と午後のセッション終了直後に、相談員が筆記により記録しました。週末に相談員が各回の記録を大学のコンピュータに打ち込み、その内容が分析されました。夏休みと冬休みが開ける直前には、関係者が集まって、取り組みの改善点などについて話し合いました。

< 「ふらっと」の利用状況 >

学期毎の利用者数推移は表 1（図 1）～表 3（図 3）に示すとおりです。1 学期の延べ利用者数は大人が 376 名、子どもが 473 名、合計 849 名で、1 回平均は 70.8 名でした。特に 7 月に入ってから 11 回目と 12 回目は親子を合わせて 100 名を超えています。2 学期の延べ利用者数は大人が 494 名、子どもが 560 名、合計 1,054 名で、1 回平均は 75.3 名でした。6 回目（10 月 9 日、台風接近）に利用者数が落ち込んでいることを除けば、1 学期と同様に回を追うにしたがって利用者数が徐々に増加しています。3 学期の延べ利用者数は大人が 430 名、子どもが 504 名、合計 934 名で、1 回平均は 84.9 名でした。平均利用者数を見ると、利用者は年間を通じて増えていったと結論づけることができます。

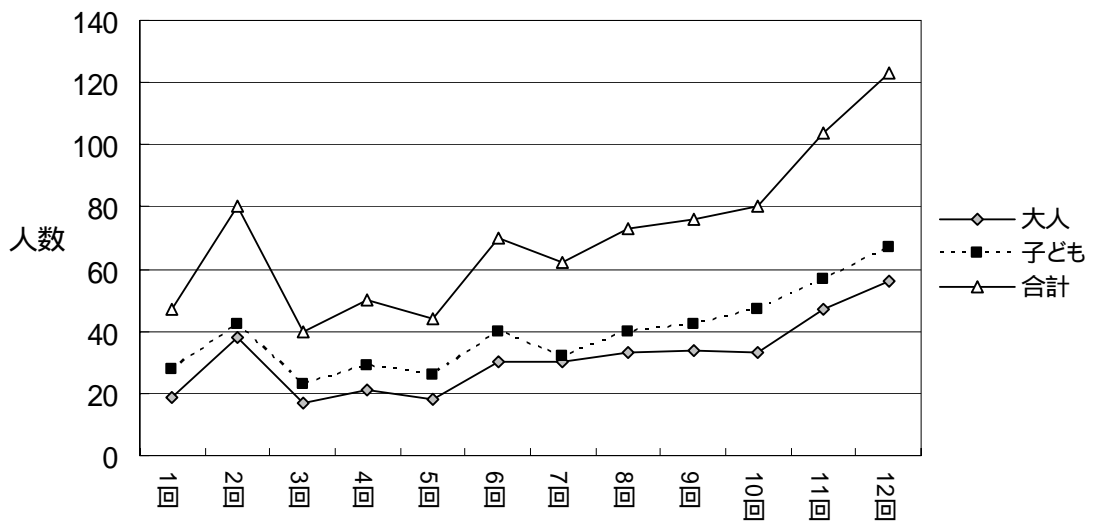


図1 1学期(4月～7月)における利用者数の推移

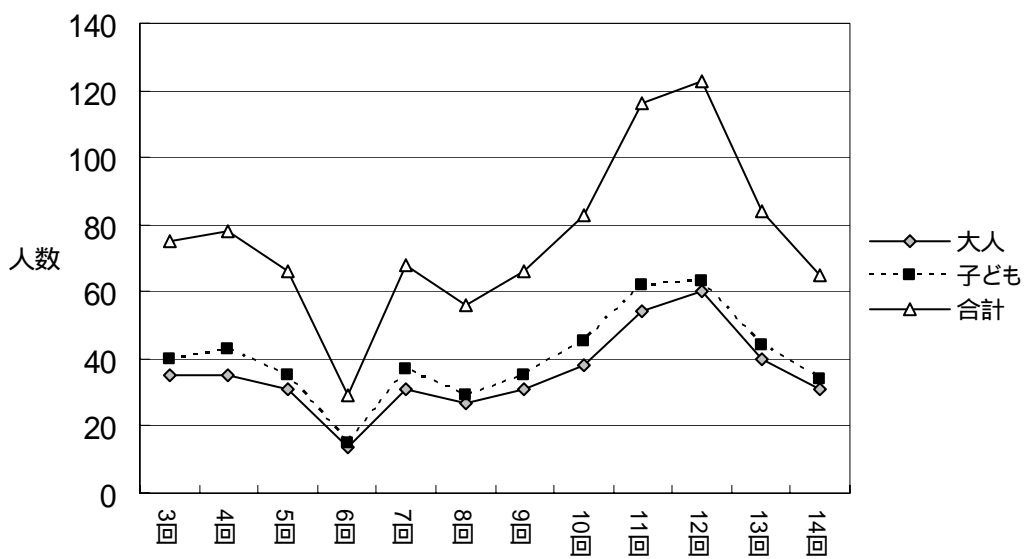


図2 2学期(9月～12月)における利用者数の推移

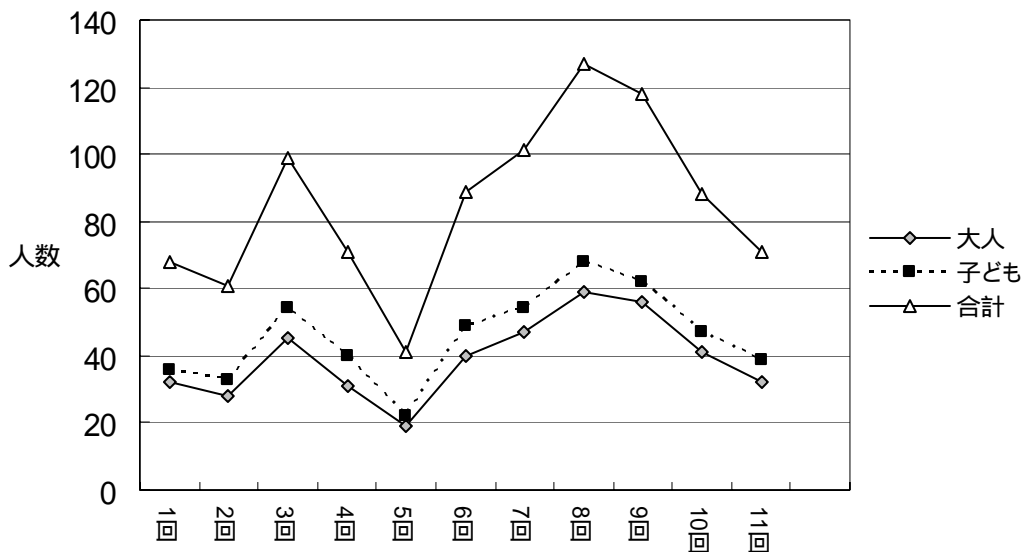


図3 3学期(1月～3月)における利用者数の推移

次に、「ふらっと」がどのように利用されてきたのか、その様子を月別にまとめてみました。

- 4月：開始したばかりで、親どうしの会話は少ないが、くつろいだ様子で静かに子どもを遊ばせる親が多かった。中には、まったく他の母親と交流せず、子どもに対しては、話しかけたり遊びを促したりせずただ見ているだけという、気になるかわりを見せず親もいた。また、はじめから育児に関する相談を目的とする利用者もいた。「子どもはマニュアルどおりに成長しないということを頭では理解できていても、自分の思ったような行動や変化を子どもが示してくれないときに、このままで大丈夫なのかと不安になる」といった相談内容が多かった。
- 5月：繰り返し利用する親子が増えたこともあり、顔見知りになった親どうしの交流や親とスタッフとの会話が活発になってきた。また、一人ひとりの子どもがどんな遊びを好むのかも親・スタッフともに分かってきた。フロアのあちこちで親とスタッフが思い思いに輪になって子どもの遊ぶ姿を見守りながらの談笑が続くようになった。学生ボランティアに積極的に話しかけ、遊びを通して子どもの経験を広げさせようとする親も見られた。観察をとおして相談員や学生ボランティアが気になったのは、「自分が思ったような反応を子どもが示さないとき、自分の評価を落としてしまったような気持ちになる母親が多いのではないか」という点であった。相談内容としては、「指しゃぶりの問題」「離乳食の与え方」などについて具体的なアドバイスを求めるものや「他の機関で指摘された発達上の問題」に対する対処法を求めるものがあった。

- 6月：自分の子どもが他の子どもと遊びたがらないという不安を持っていた母親も、その場の雰囲気慣れたり、最初から遊べなくてもそれが普通であるというアドバイスを受けてりするなかで緊張がほぐれて、その表情が変わっていった。それに呼応するように、子どもも安心して他の子どもと遊べるようになる姿が見られた。また、個別の相談が増え、その内容は「夜泣き・食事・しつけ・他児とのかかわらせ方・母親の思い通りにならないときの子どもへの対応法」など幅広いものとなっていた。
- 7月：口コミによって利用者が増え、話しかけられるのを待っている様子の母親や、他の利用者といっしょに触れ合えるようスタッフからの促しが必要とされる親子も多く見られるようになる。この月に入り利用者数が非常に多くなったことから、相談を主な目的として来ている積極的な親には何とか対応がとれるが、相談員・ボランティアともに初めて参加する人に対して、「ふらっと」に慣れてもらうための働きかけに多くの時間が占められるようになった。その結果、前月までのように自然に相談が始まるという雰囲気が減り、対応が取りにくくなってきた。
- 9月：夏休み前に利用していた親子の多くが、再開日から利用した。学生ボランティアが増員されたせいもあり、初めて参加する親子に対する学生たちの働きかけが母親に安心感を与えている様子であった。何度も来ているか、参加したばかりかにかかわらず、ボランティアと子どもが遊んでいるところへ母親が自然体で加わって楽しむ、という姿が見られた。おもちゃの取り合いが時々見られるが、これは子どもが社会性を身につけるために必要な経験であり、介入しないほうが望ましい。しかし、母親によっては子どもの後をついてまわり、取り合いにならないように神経質になって先回りをしてしまうケースもあった。
- 10月：1学期は週を追うごとに利用人数が増えて、スタッフが初めて利用する親子に慣れてもらうための働きかけに終始せざるを得なかったため、相談をしたい親は午後に来ることが多かった。しかし、今学期に入って参加人数が安定してきたこともあり、子どもを遊ばせながら自分から相談員に話しかける親が増えてきた。相談内容は、離乳食の与え方や授乳の方法など日常的なアドバイスを求めるものが多かった。母親と相談員がともに遊んでいる子どもの様子を見ながら話し合うことを繰り返すうちに、当初、疲労感に満ちていた表情が次第に明るくなっていく母親もいた。アドバイスをヒントと受け止め、それを応用して自分なりの対処法を工夫している母親もいた。また、「私のやり方は～」と、母親どうして子育ての方法に関して積極的に情報交換する姿も目立ってきた。
- 11月：学生ボランティアの子どもに対するかかわりの技能が向上していくのにもなって、子どもを安心して任せられることから、また、参加者数が増えて誰かが子どもを見てくれるだろうという気持ちから、子どもを置いて買い物に出かけたり、子どもを放ったままおしゃべりに夢中になってしまったりするケースが見られた。そのような母親に対しては、スタッフのほうから子どもの様子を伝えるように心がけた

ところ、そのような母親も子どもとスタッフの輪の中に入れてくれるようになった。今後も、このような母親に対しては、子どもが遊びを通して成長している姿が目にとまりやすいような働きかけを続けるという方針がスタッフのあいだで確認された。

- 12月：11月中ごろより初めて利用する親子が増えてきたが、今月に入ってさらにその数が増加した。また、午後からの利用者は前月までは2～3組程度であったが、口コミで午後の利用者が10組近くに増加した。そのほとんどが乳児を連れた初めて利用する母親であった。相談内容はこの時期特有のものが目立った。たとえば、風邪の流行期が近づいていることから病院や診療所の情報を求める母親、幼稚園の入園が近づいていることから子どもの集団に適應できるかどうかや子どもの生活習慣に不安をもつ母親が数多くいた。
- 1月：冬休み明けであることから、リピーターの利用者どうしが来館時に懐かしそうに挨拶を交わし、早々にフロアの各所で輪になって休暇中の子どもの様子や生活などについて互いに語り合っていた。この月、スタッフの活動は、主に、まだどのグループにも加わっていない親子に積極的にかかわることであった。学生ボランティアと母親とのあいだで会話が弾み、相談のある様子の母親を相談員にスムーズにつなぐことができるようにもなった。また、2歳前後の子どもたちの遊びを中心とした交流が広がってきた。しかし、0歳児の親子の利用が増えてきたため、安全確保という面から、年齢別に場所の区分をおこなう必要性が感じられた。
- 2月：この月、テレビで自閉症児に関する番組（部分的な特徴だけを強調する内容）が放送されたせいか、「自分の子どもが自閉症ではないか」という不安と悩みの相談が多かった。情報過多のなか、報道のあり方によっては、母親の不必要な不安を煽る可能性が高いことに気づかされた。また、開設の初期から利用している母親の中には、二人目の子どもを出産した母親が増えてきている。そのことに伴う上の子どもへの対応、下の子への新しい戸惑い（上の子には経験しなかったことなど）に関する相談、母乳に関する相談などが増えてきた。
- 3月：ままごとコーナーで遊ばせる母親の中には、おしゃべりに夢中になって子どもの様子を見ていない、あるいは子どもの働きかけに適切な対応をしていないという傾向が見られた。このような場合、子どもが興味を持って遊んでいるままごとの様子を伝えて母親に目を向けてもらえるような中間支援的なかわりを工夫することがスタッフに求められるのかもしれない。3月は年度末であるため、学生ボランティアが少なくなり、少ないスタッフだけで対応せざるを得ず、安全面での気配りには苦慮した。しかし、子どもの遊びを学生ボランティアにまかせっきりにしてきた親とその子どもとスタッフの三者間には新しい関係性が見られるようになった。

<利用者による「ふらっと」の評価>

調査は、2005年12月に実施しました。調査に回答をした66名はすべて母親でした。そのうち7名が2人の子どもを連れてきていましたが、年下のほうの子どもはすべて第2子でした。

「ふらっと」を知ったきっかけについては、灘区（保健福祉部）の広報で知った人が18名（27.3%）、児童館をふだんから利用していて知った人が12名（18.2%）、友人の紹介で知った人が28名（42.4%）、その他が8名（12.1%）でした。友人の紹介が「ふらっと」を利用するきっかけになったケースが約4割と最も多く、口コミによる情報の重要性を示しています。

「ふらっと」を利用する理由については、「子どもを遊ばせるため」「自分の友人をつくるため」「子育てについての情報交換のため」「子どもが様々な人とかがかわれるように」「子育てについて相談できるから」「その他」の6つの選択肢を用意しました。ほとんどすべての母親（98.5%）が子どもを遊ばせるために、約3人に2人の母親（64.4%）は子どもが様々な人とかがかわれるように、と回答していました。ここから、母親は子どもの成長を第一に考えて「ふらっと」を利用していることがうかがえます。また、約3人に1人の母親（38.5%）が友人をつくって情報交換をしたいと考えて「ふらっと」を利用していました。

「ふらっと」に調査時期まで何回くらい利用したのかについては、「はじめて」「1回～2回」「3回～5回」「月1回以上」「ほぼ毎日」の5つの選択肢を用意しました。被選率は順に19.7%、28.8%、15.2%、13.6%、22.7%でした。開設から約8ヶ月を経過したあともなお、はじめて来る親子が約20%いることから、「ふらっと」がリピーターだけに固定して利用されている場ではないことがわかりました。また、1回～2回とほぼ毎回がともに20%を超えていることから、時間が空いたときやどこにも行くところがないときにのみ利用する親子と習慣的に頻繁に利用する親子の2層化が進んでいるとも考えられます。しかし、全体的にはいずれの選択肢に集中しているわけでもなく、それぞれの親子が思い思いのペースで「ふらっと」を利用していると判断できます。

「ふらっと」を利用することで、育児の面で何らかの変化があったかどうかを自由記述するように求めた結果、5つのカテゴリに分類することができました。それらは、母親自身に友人ができた・友人が増えた（回答数4）、育児に関する固定観念が消えた（回答数2）、育児の面で気が楽になった・気持ちに余裕ができた（回答数9）、安心感をもてるようになった（回答数5）、具体的な自己成長・育児行動の変化（回答数7）でした。気が楽になった・余裕ができたというカテゴリ、安心感をもてるようになったというカテゴリ、具体的な自己成長・育児行動の変化というカテゴリに入る記述をした回答者は、そのほとんどが、ほぼ毎回および月1回以上「ふらっと」を利用してきた母親でした。

「ふらっと」を利用することで、子どもに何らかの変化があったかどうかを自由記述するように求めた結果、5つのカテゴリ（下線部）に分類することができました。それらは、生き生きしてきた（回答数 8）、友だちと楽しく遊べるようになった（回答数 5）、友だち意識の芽生え（回答数 3）、交友や遊びのための技能の獲得（回答数 5）、人見知りの解消（回答数 9）でした。

「ふらっと」の長所・短所・改善点について自由記述するように求めました。ポジティブな評価として記述された回答は6つのカテゴリに整理できました。それらは、ふらっと全体に満足している（回答数 5）、自由度が高いことへの評価（回答数 7）、相談機能への評価（回答数 5）、子どもが学生ボランティアと遊んでもらえることへの評価（回答数 6）、子どもの交友関係が広がることへの評価（回答数 4）、遊ぶ環境への評価（回答数 2）でした。ネガティブな評価は、利用人数の多さからくる懸念（回答数 5）という1つのカテゴリにまとめられました。改善すべき点は、4つのカテゴリにまとめられました。それらは、実施回数を増やして欲しいという要望（回答数 9）、環境条件（回答数 5）、運営システム（回答数 4）、プログラムへの要望（回答数 3）でした。

「ふらっと」のような場所が居住地の近くにあることの必要性を「はい」「いいえ」の2つの選択肢から選ぶように求めたところ、未記入者4名を除く62名全員が「はい」を選択しました。ここから、「ふらっと」は、ほとんどの親子にとって有用であり、家の近くにあったら良いと判断されていると思われます。

< 児童館による「ふらっと」の評価 >

この取り組みがおこなわれているのは児童館です。そこで、児童館という立場からの「ふらっと」に対する評価情報を得るために、神戸市内にある児童館（93館）の館長を対象とする質問紙調査を2005年1月実施しました。76館からの協力が得られましたが、その区別内訳は、東灘区 8、灘区 6、中央区 4、兵庫区 8、北区 11、長田区 8、須磨区 12、垂水区 9、西区 10 で、回収率は 82% でした。

「ドロップインを基盤とした取り組みにあなたは関心がありますか？」という問いに対し、「関心があるし、自分の児童館でも実施してみたい」44.7%、「関心があるが、今、自分の児童館で実施するのは無理である」27.6%、「関心はあるが、自分の児童館で実施するつもりはない」6.6%で、「関心がない」0%でした。また、「その他」は21.1%と比較的多く、その具体的内容（自由記述）のほとんどが、（いくつかの制約や違いはあるものの）「ふらっと」とほぼ同様の事業をすでに実施している、というものでした。ここから、児童館におけるドロップインを基盤とする取り組みは、決して新しいものではなく、少なくとも全体

の約5分の1の児童館ではそれが実施されていることが明らかにされました。また、調査対象のうち、すでに示した「実施してみたい」という児童館と「(今は無理だが)条件が許せば実施したい」とする児童館を合わせると全体の約72%となっていることから判断しますと、ドロップインを基盤とした「ふらっと」のような取り組みに対する期待とそれが今後発展していく可能性は大きいと考えられます。

「ふらっと」の4つの基本方針については以下のような評価が得られました。

- ・周産期から年齢を問わずに参加できるという方針について、76.3%が良いことだと肯定しました。これに対し、18.4%がどちらとも言えないを選択しました。また、それぞれに対する自由記述から、妊娠中の母親や生後間もない乳児とその親が、先輩の母親や子どもと仲良くなったり交流できたりすることが子育て支援として非常に重要であるという認識が多くの児童館によって共有されている一方で、周産期までを視野にいれて体制をつくることの困難さと子どもの年齢差があることから生じる不安などが一部の児童館にあることが分かりました。
- ・相談したいときにいつでも相談できるという方針については、81.6%が良いことだと肯定しました。これに対し、14.5%がどちらとも言えないを選びました。また、それぞれに対する自由記述から、多くの児童館は、悩みが生じたときにタイムリーに対応できるというメリット・必要なときにいつでもすぐに身近に相談できる(人がいる)ことが母親に与える安心感・個別のかかわりによって相談者一人ひとりに合った明確なアドバイスが可能になることなどを認めている一方で、一部の児童館は、相談を受ける専門性のあるスタッフの配置、プライバシーの問題、専門家への引き継ぎも含めた責任の範囲などに困難さや懸念を感じていることが示されたと言えます。
- ・行きたいときだけ行けるという方針については、84.2%が良いことだと肯定しました。これに対し、11.8%がどちらとも言えないを選択しました。また、それぞれに対する自由記述から、決められた日時に行かなくてはという義務感から開放され、いつでも行けるという安心感・時間に拘束されずに自分の生活パターンに合わせて気軽に利用できる点・自分で決定して出かけるという主体的行動から得られるものの大きさなどのメリットを多くの児童館は認めている一方で、一部の児童館は、利用人数の変動への対応・個別の対応が必要となること・相談を継続したほうが良い場合の対応に難しさや懸念を感じていることが明らかにされました。
- ・プログラムなしで子どもを自由に遊ばせられるという方針については、59.2%が良いことだと肯定し、35.5%がどちらとも言えないを選びました。他の方針に比べ、この方針

に対する肯定の割合がもっとも少なく、どちらとも言えないとする回答が多かったことから考えますと、かなり多くの児童館がプログラムのないことに一定の問題点があると考えていることがうかがえます。また、それぞれに対する自由記述から、約半数の児童館は、自由に遊ぶことによってもたらされる個々の子どもの成長・子どもの月齢やパーソナリティなどの個人差に対応できること・母親どうしや子どもどうしの交流が深められることをメリットと認識している一方で、3割以上の児童館が、プログラムがないことから生じるインセンティブの低下・家庭に帰ってからの子育てに役立つ内容が身につかない点・子どもたちの一体感の欠如・明確な来館目的がなくなること・教育的効果が望みにくいこと・遊具の取り合いやけんかの発生・友だちのいない親子の館における孤立などを心配していることが示されました。

実際に「ふらっと」のような実践しようと思っているのか・思っていないのかにかかわらず、「もしも、あなたの児童館で『ふらっと』のような取り組みを実施しようとした場合、どのような条件が障害(ネック)になりますか?」という問い(複数回答可)に対し、スペースが狭いことを選択した児童館は40.8%、スケジュールに余裕がないことを選択した児童館は25.0%、職員数が足りないことを選択した児童館は59.2%、相談員の配置がむずかしいことを選択した児童館は65.8%、ボランティアの配置がむずかしいことを選択した児童館は48.7%、広報がむずかしいことを選択した児童館が5.3%、区の関連部署や大学との連携がむずかしいことを選択した児童館が15.8%でした。人的資源に関する3つの項目(下線部分)が上位3位までを占めていることが特徴的です。

<まとめと結論>

これまでで述べてきた「利用者からの評価」「児童館からの評価」によって明らかになったことを、ここでもう一度まとめてみます。

まず、ドロップインセンターは、多くの利用者から支持を受けていました。その主な理由は、自由度が高いこと、相談機能があること、子どもがボランティアに遊んでもらえることでした。これに加え、ドロップインセンターのような取り組みを行っている児童館がすでにあること、そして、そのような取り組みに関心を持ち、今後、そのような取り組みを試みたいと考えている児童館が多くあることも明らかにされました。しかし、この取り組みを実行しようとするときの課題は、人的資源の確保・配置であることも示されました。具体的には、職員数の不足、相談員の配置のむずかしさ、ボランティアの配置むずかしさです。言い換えれば、地域のなかで、相談員やボランティアとして積極的にかかわってくれる人材がいれば、児童館でのドロップインセンターは多くの地域に広がっていく可能性が高いのです。